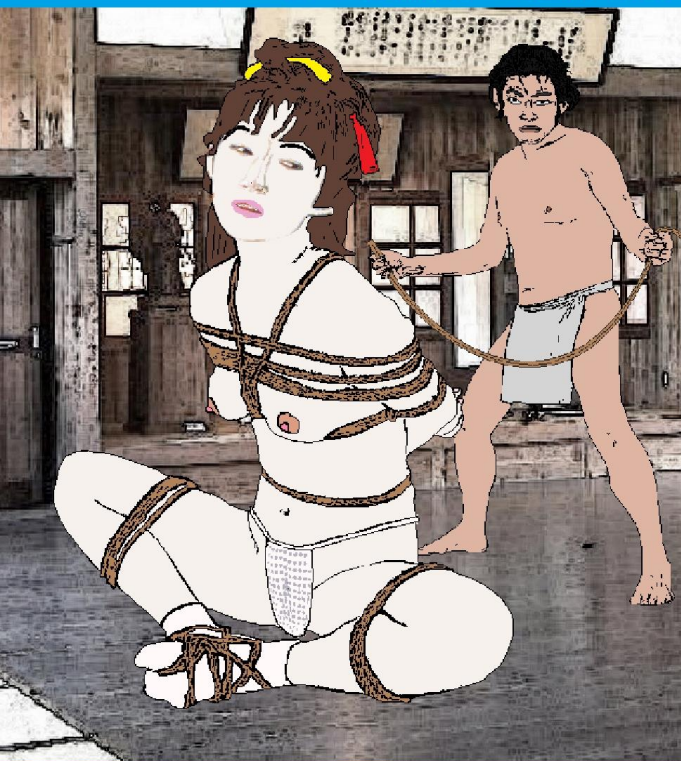


編索模 風肌劍悲

劍人女する復活で地死



著 恭長門濠

二之卷

登場人物

神崎 弥恵

正安の妻となつて柴田家とは縁を切り、正安に嫁ぐ。偶然に発動した秘剣を再現せんと模索中。

神崎 正安

神崎古流六代目。弥恵を娶るが、少年時代の苦い記憶に妨げられて新妻を女に出来ず苦悩している。

柴田 七郎

姉の援けを得て父の仇を討ち、柴田家の世襲を認められただけでなく、若君の小姓（次代の重役）に抜擢される。

奎助

柴田弥一郎（姉弟の父）に徴用されていた中間。

小島要介

柴田弥一郎の政敵、小島政衛門の嗣子。主君の肝煎りで弥恵と婚約するが、仇討で白紙に戻った後も弥恵の身体を貪ろうとして返り討ち（？）に遭う。未だ、弥恵への未練を残している。

注記

本作品は『悲剣肌風（巻之一）』発動編』の続編です。本編だけで完結していただけますが、前作を併せてお読みください。本編だけ楽しんでいただけたらと思います。

目次

一	不	発	五
二	位	牌	十
三	緊	縛	十
四	呵	責	五
五	密	談	
六	迂	闊	
七	肌	風	
後	書	き	

暮れ六ツまで半刻。窓という窓には簾が下ろされて、道場の中はすでに薄暗い。弥恵の裸身だけが、ほの淡く輝いているように見えたと。しかし、その白い肌には幾筋もの線條が走っている。

弥恵は禪一本の姿で右半身に愛用の小太刀を構えているのだが、

紺に染めた手拭いで目隠しをしていた。その見えない目を、二間の向こうに立って二尺六寸を八双に構えた正安に向けている。刃引きではなく、どちらにも真剣だった。

正安が右へ動きながら、じりじりと間合いを詰めていく。弥恵も左足を引きながら身体の向きを変えていく。肌風――相手の斬撃を前もって肌に感じて対応している。のではないと、弥恵自身が痛感している。視覚を奪われたぶんだけ聴覚が研ぎ澄まされている。蟬

しぐれの中から、正安の足裏が床を擦る音、かすかな衣擦れ、息づかいなどをかろうじて聞き分けて、およその動きを察知している。だに、正眼に構えた切っ先は正安の位置を正確にはつかんでいない。その証拠に、正安の動きが一瞬、止まった。

（来る……！）

弥恵は右へ大きく踏み込んだ。身体をまわしながら小太刀を左へ薙

ぶうん、かしやつ。

「ああ……！」

弥恵は小太刀を取り落とし、両手で胸をかかえて床に膝をついた。

斬撃そのままの勢いで乳房を峰打ちにされたのだった。

「ぐ……」

息が詰まって、身じろぎひとつできなかった。

「すまぬ。峰を返すまでは本気で斬りにいったのだ」

「弥恵が、かすかにうなずいた。弥恵には、先生への甘えがあるようにで

す」

左へ回り込まれたからには、正安の斬撃は左から来る。裏をかいたり、はしないだろうという予測が、弥恵を大胆に右へ踏み込ませていた。正安が弥恵の反撃をかわすだろうことも、けっして命にかかわる傷を自分に負わしたりしないだろうことも、弥恵は予測していた。正安への信頼であり、甘えであった。肌風は――もし、そんなことが出来るとしても――生死の境目でしか発現しないのでは、ないか。火事場の馬鹿力のようなものだ。数日の試みのあとで、正安はそのように言った。いくら真剣をもつて対峙しても、相手を信頼して、そのうえ甘えていては、発現のしようもない。正安が弥恵に目隠しをさせたのも、危機感をつのらせるためであった。と、同時に。肌風がまことに肌の感覚に由来するのであれば、

目が見えていてもいなくても変わりがないかもしれないと考えてのことだった。

「正安の試みは失敗に終わったと、いつてよいだろう。」

「今日は、ここまでとしよう。」
正安は膝をついて、まだうずくまっている弥恵の肩を背後から抱きすくめた。

「痛むか？」などと、わかりきったことは訊ねない。

正安は左手で目隠しをはずしてやり、その手を前にまわして、乳房を押さえている弥恵の手に自分の掌を重ねた。
身体の陰になつてゐるが、脇腹にも、青黒い痣が刻まれている。
筋と走っていることを、正安は知っている。すべて、正安のつけた傷だった。

刃が肌に触れる一尺手前で峰を返して渾身の力で腕を引き止め、一寸どころか一分たりとも刃を引いたり滑らせたりはせぬから、皮

一重も斬れてはいない。しかし、柄を加えれば長さ三尺余の鉄棒で殴りつけるといけないから、無事にすむはずがない。骨が折れたり筋を痛めたりしていいのは、正安の技量によるものだ。それでも。帰郷したその日から始めて、内輪の祝言の当日だけは休んだが、今日まで十五日のあいだに弥恵の肩から腰までは痣だらけになっていた。

ごくつと、正安が生唾を呑んだ。弥恵の手の内側に我が手をすべりこませて、少女めいた硬さを残す乳房を掌に包んだ。

「まだ痛むか？」

その言葉にこめられた言外の意味を、弥恵は察した。そして、首をわずかに振った。

「もう……」

三日前に初めて道場で押し倒されたときは、驚きもしたし呆れもした。

「神聖な道場で……」

「男と女がひとつになつて新しい命を創るのじゃ。これほど神聖なことが、ほかにあるうか」
押し切られてしまつたのだが、正安に不都合があつて、構合は遂げられなかつた。
このとき限りのことではない。祝言の当夜、翌日、一日おいて四日目と、構合はかなわなかつたのだ。正安はちやんと抜き身を構えるのだが、いざ討ち入りの門前でへたり込んでしまう。さらに二度の虚しい夜をかさねて、ついには三日前に道場での仕合を試みたという次第だつた。
そういつたときの正安は、可哀想になるくらいしよげ返る。生娘にはわからぬ男の問題とは、このことだつたのかと――しかし、弥恵の正安への信頼と思慕は、決して揺るがなかつた。ひとつには、ただ正安がその場で意気消沈するだけで、八つ当たりなどはず、半刻もすればいつもの神崎古流六代目宗主に立ち戻つてゐるからであつた。正安の言葉を借りれば、なによりも神聖な行為における男の

恥ずかしい部分を無防備に晒している。
正安の立ち上がる気配があつた。せわしない衣擦れの音。指の隙
間からうかがうと、正安の股間には懐劍（太さは鞘ほどの音。ある）が
上段に構えられていた。早変わりのは絡繰を教える代償として弥恵の
肌を要求した座長の逸物よりは、ひとまわり小ぶりだった。危な絵
に比べれば、大人と子供ほどの違いがある。小さいというものが正
安の不能と関係しているのだから、か、と、弥恵は疑っているのだ。
実のところ、懐劍ほどの長さ（と、鞘ほどの太さ）というのは並
の男の持ち物より大きい――という、ことを知らなかった。の
道場の床板がわずかに軋んで。両膝の間に手を差し入れられ、腿
を左右に開いて膝を立てさせられた。正安の息が顔にかかった。間
近に正安の肌の温もりを感じた。
（こたびこそは……）
はしたないと思いつつも、弥恵はそれを待ち焦がれている。媾合
つてこそその夫婦であり、現代でいうところの素股を許した座長の痕

跡を拭い去ることが出来る。

「しかし。ため息とともに正安が身を起こす気配があつて。

「：：すまぬ」

苦渋に満ちた低いつぶやきを聞いた。弥恵は無言で脚を閉じた。
なんと云つて夫を慰めればよいか、わからなかつた。

肌風を再現する試みはいったん休み、
閨でもただ布団をふたつ並べて寝るだけの夜が四日つづいた。それはふたりの日常にあつて、
ささやかな変化でしかなくつた。それ、
午前中は正安が門弟に稽古をつけ、
畢竟は奥向きの用事を片付け
る。道場の清掃は門弟がするから、
ふたりだけの
所帯。以前から雇つていたかよいの女中には暇を出した。
午後になると、
弥恵ともうひとりの高弟とで、
新規の入門者に基
礎の稽古をつけ、
この十日あまりのうちに八人が神崎古流の門を
敲いた。名譽の仇討を成し遂げた柴田七郎が学んだ流派として名聲
を高めたのは無論だが、
その七郎を援けた姉が使った秘剣――あえ
て晒した素肌に太刀風を感じて身をかわけたという肌風が、
卑劣な奇策
興味を惹いた。と、
いうより、
女人の裸で相手を惑わす卑劣な奇策

と誹謗される先手を打って、正安が意図的に流布したのだった。と
その日の五ツ半（午前九時）を過ぎて、十日ぶりに柴田七郎が道
場へ稽古に来た。―
「ご無沙汰をいたしました。―
柴田家を嗣いだ七郎は、すぐさま若君の小姓に取り立てられた。
いずれ若君が藩主になられたあかつきには、小姓の何人かは重職に
任ぜられる。殿様は四十七歳、若君は二十五歳。いずれどころか、
数年先の話かもしれない。あまり早すぎない、十四歳の少年はかえ
って立身出世の機会を得られないかもしれない。城内ののだが。
いと侍としての作法は父から厳しく仕込まれ、城内でのしきたりに
側近く仕えるともなれば、格式だの先例だの不十分だった。世嗣に
城すれば先輩たちの後ろで一挙手一投足を見習い、非番の日は年配
の誰彼に教えを乞う。そのうえに、是非とも武勇伝をうかがいたい
と、遠戚の縁戚からまで宴席に招かれる。

稽古にかようどころか、姉の嫁ぎ先へ挨拶に立ち寄る暇もない日々がつづいていたのだった。

「どうにか、身の回りも落ち着いてきました」

「これから一日おき、非番の日には稽古にかようつもりだと、七郎が言う。」

「世間の噂の、せめて半分くらいには強くならねば、面目が立ちません」

「十日の余も稽古をしていなければ、腕も落ちたであろう」

「朝の素振りは欠かしておりません」
七郎は見所の前から下がると、稽古着に着替えて竹刀を握った。
道場では三組が打ち合っているが、まだ二間四方くらいが空いている。

「保坂殿、お相手を願えますか」

「四分六で分の悪い十二番札に向かつて、七郎が頭を下げた。」

「よろしくお願い申す」

三十に手の届こうかという小柄な男が立ち上がった。十四歳の少年にしては大柄な七郎とは、ほぼ同じ背丈。

「いざ」

互いに正眼に構えて対峙して。剣先が触れ合うなり保坂が右小手を空けたが、七郎は誘いに乗らず、反対側へ大きく踏み込んだ。

「えいっ！」

びしっとな乾いた音を立てて、七郎の竹刀が相手の左肩を打った。

打撃は軽いが、じゅうぶんに残心のある一撃だと、見る者は見る。

保坂は右へ変わりながら反撃の勢いを見せたが、すぐに竹刀を引いた。これが真剣で七郎が本気で斬り込んでいたなら、保坂は致命

傷を負っている。

「まいった。途轍もなく強くなれたな」

言われたも、七郎に実感はない。素振りの迅さと正確さとは、三日に二回の割で道場へ稽古にかよっていた頃より落ちているような気がしている。ただ。相手の小手が空いた瞬間に意図を察知して、

考えることなく逆を衝いたのは、自分でも意外な動きだった。

「三年分の修業を積んだわけじゃな」

にこりともしないで、正安が言った。人ひとりを斬るのは道場での稽古の三年分に匹敵するといわれている。正安は七郎の進境を認めたが、それが仇討とはいえ殺人のうえに成り立っているのだから、手ばなしで褒めるのはばかられる。正安の無表情は、そう語っていた。

「では、俺も腕を試させてもらおう」

八番札の荻野目が立ち上がった。

「やめておけ。三年分も身体が大きくなったわけではない」

正安の言葉に、何人かが笑った。荻野目は道場随一の巨漢だ。七郎とでは、まさしく大人と子供の仕合になる。

——その後、七郎は十番札と互角に戦い、十四番札は余裕をもって受け太刀にまわってから胴をじゅうぶんに斬った。正安は七郎の札番を十三に繰り上げた。

「非番の日はかようと言うていたが……」

その日の稽古が終わった。七郎は残つて、昼餉を供にした。この場で、正安は七郎の師であると同時に義兄でもあった。正安も、くだけた物言いになつてゐる。

「書付のほうは、どうするのか？」

「役向きのことは、違います。誰彼となく押し掛けるわけにもいきませんから」

小姓勤めをしながら、忙中に閑を盗む手口も先輩に教わつたと、七郎は歳相応にいたずらっぽく笑つた。その盗んだ閑に、まずは御蔵番と昵懇になるつもりだと、これは真顔で言う。

「父のことで。受けた金品は藩への献上と見なして、そのように処理をしたと思ひますから」

「ふむ……いきなり打ち明けたりはするなよ。家宝のひとつが見当

たらぬ。もしや殿様に献上したのではないかと口実を設けて、出入帳を見せてもらうのがよからう。あくまで、内済にな」
いつか、ふたりの話し声は小さくなっている。算盤家老とか依怙の沙汰が過ぎるとか陰口をたたかれながら、しかし父は清廉潔白だったと姉弟は信じている。その父が、煙草株座から締め出されている商人たちから賄賂を受けていたはずがない。

大倉屋 乙丑如月 ぎやまんだら

花菱屋 乙丑卯月 京美人

山都屋 丙寅長月 黄金拵登竜噴水鉢

大倉屋 丁卯睦月 すてろじれはおはる

この謎めいた書付を見つけたのは、仇討を果たして帰参した翌々日のことだった。あらためて簡素な法要をしてから、仏壇に祀ったままにしてあった戒名札の供養を和尚に託した。父を先祖の霊と一緒に祀るために、表に戒名を、裏に俗名と没年と享年を書き写した

小さな木札を収めようとして回出位牌くりだしを開けたとき。

「……？」

木札と同じ大きさに折りたたまれた紙片を、七郎が見つけた。広げると、先の四行が記されてあった。弥恵と七郎はむろん、叔父の柴田満三郎にも、なんのことだかわからなかった。

「他言無用がよろしかろう」

正安が七郎の手から紙片を取りあげて、元どおりに折りたたんでから返した。

「形見分けについての遺言じゃ。このような仕儀になるとは思わなんだ頃のもののゆえ、遺言どおりに致すのは不都合がある。弥一郎殿の思いを裏切らぬ形で、あらためて七郎殿が差配いたす。不平不満の種を撒かぬためにも、この書付は余人に見せぬ」

内輪の法要とはいえ、使用人もいれば父に忠実だった下役もいる。その者たちへ向けた言葉だった。奎助がきな臭い顔をしたのに弥恵

は気づいたが、二日後に迫った祝言や、その後のことに気が向いて、正安、弥恵、七郎の三人だけになつてから、書付の謎を話し合つた。書付にある乙丑は二年前である。この二年間に父が受けた賄賂の品を書き残したのではないかというのが、三人とも勘繰りだつた。農事方家の老の柴田弥一郎が賄賂を贈られるとしたら、それは煙草株座にからんでのことだらう。煙草は生活に不要の嗜好品である。だからこそ、味わいのわずかな違いで値段は何十倍も違つてくる。品薄の銘柄は高騰する。増沢煙草には独特の香りがあつて、吸つたときの酔い心地にも定評があつた。しかも、柴田弥一郎は意図的に生産量を抑えさせていたし、極上品を京や江戸に献上して箔付けにも抜かりがない。煙草株座に新規参入できるなら、千両でも安いものだ。とはいえない。小判ではあからさまなので、高価な贈り物の形をとつたのだろう。

それとも、父はもつとたくさんの賄賂を受けて、珍奇な品だけを書き留めたものか。『ぎやまんだら』とはギヤマンの細工物と判じられるし『黄金拵』は文字通りの黄金だろう。『京美人』は京人形のことか。生き人形とも勘繰れるが、これは貰ったほうも始末に困る。『すてろ』何とやらだけは皆目見当もつかないが、ほかの三品同様の飾り物と思われる。

しかし、それらのいずれも、弥恵も七郎も目にしたことはない。すぐに納戸を調べたが、それらしい物はなかった。

「これらがどういう物で、なぜに商人から受けたのか、どう処分したのか。是非にも知りたいと思います。」

父の潔白を信じるからこそ、真実を究明したい。その思いは、弥恵も同じだった。

「墓をあばくのが親孝行：：か。」

「しばらくの沈黙の後、正安がぼつりと言った。
「斬られに行くのか」と、別れの挨拶に來た弥恵につぶやいたのと

同じ口調だった。しかし、そこから先の言葉はなかった。

三・緊縛

この日は新弟子たちへの教授がなかったもので、七郎も長居をして、道場を辞したのが未の刻（午後二時）過ぎ。洗濯物を取り込むにも、夕餉の支度を始めるにも、まだ一刻半はある。

肌風の試みは中断していたが、合間合間にふつうの稽古はつづけている。正安への掛かり稽古だから、弥恵の腕は日に日に上がっている。三年分の稽古の上に最上の稽古を重ねて、三羽鳥の中で一頭地を抜いてきたのではあるまいか。

「今日は、下帯で……な」

稽古着に着替えるために寢所へ行こうとした弥恵の背中に、正安が声を掛けた。

先生は、またなにか工夫を考えつかれたのだろうか。今日こそは、肌風を再現したい。弥恵の心には焦りがあつた。

藤原数馬との闘いで、たしかに弥恵は通常とは違う感覚の中にいた。彼らの動きがおそろしく緩慢で、つまりは常になく思考が迅かかった。そして、たしかに斬られる前に痛みのような肌を引き攣れを感じて、それを避けて動いた。ように思える。しかし、それはすべて――死を覚悟したがゆえの、尋常でない心持ちが惹き起こした錯覚、だったのかも知れない。そこに、弥恵を救いたいのための正安の方便が偶然に合致したに過ぎないのだとは、考えられないだろうか。

もし、そうであれば。正安は人々を欺いたことになる。方便を嘘にしないために、肌風を再現してみせなければならぬ。方便を嘘にしないためには。今日も徒労に終わって、肌身に痣が増えただけだったとしても。弥恵に失望だけが残るのではない。ただ師弟の間柄だけではない。正安も、正安もこんな意識までは打撃は加えない。身体、心の結びつきに替わる絆。はつきりと意識までは打撃は加えないが、弥恵の心の奥にはそんな思いがひそんでいるのだった。

弥恵は五尺（鯨尺の六尺は、細い女の身には長すぎる）の晒し布を持って道場へ行き、そこで裸になつてすっかり慣れてしまった手つきで下帯を締めた。待つほどもなく、正安が姿を現わした。

（……？）

正安も下帯一本の裸形だった。手には刀でなく、縄束を持っていた。

「今日は肌風ではない。厭ならやめるが……おまえを縛らせてくれぬか？」

正安の声は噎れていた。

「捕縛術の稽古ですか？」

武術百般を号する神崎古流には、むろん捕縛術も含まれている。弥恵は、まだ習っていない。その伝授だと考えるのが、ふつうの思考だろう。

「む……そうではない。ないが……正安、後生の頼みだ」
論旨明快な正安にしては、はなはだ曖昧な物言いだ。それに

しても、後生とは。正安の顔は真剣そのものだった。いや、切羽詰まっ

正安は剣の師であるばかりでなく、命を拾ってくれた恩人（死を妨げた人、という恨みはすでない）でもあり、まだ身体結びつきはなくとも、きちんと祝言をあげた夫でもある。疑問はあったが、弥恵にためらいはなかった。

「お考えのとおりになさってくださいませ」

弥恵は正座したまま、正安に背を向けた。縛られるのは背後から――これは一瞬で着物を替える早業を見きわめるために何度も観た芝居で覚えた、捕囚の所作だった。

正安の足音が背後に迫って、止まる。弥恵は手首をつかまれて背後へねじあげられた。

「あ：：」

二の腕を水平にして重ねられた手首に、二重に折られた縄が巻きつく。縄尻が左右に分かれて、二の腕も縛った。背中菱形を描く

形で首の後ろに縄が留められ、そこから首の前にまわる。四本の縄が乳房の谷間で結び瘤を作ってから下へ引かれて、臍の上で胴を巻く。その縄尻が身体の正中線を下りている縄を二本ずつ絡めて左右に引き絞られる。

「くう：：」

縄で菱形に腹をくびられて、弥恵の口から自然と息が漏れる。縄はさらに、二の腕を縛った縄に絡められ、喉元から乳房の間で縦縄を左右に引き絞った。その要所要所に留め結びが作られる。

「神崎古流捕縛術のひとつ、小目菱縄こもくひしなわ」

弥恵は上半身を嚴重に縛された。芝居でトヨが縛られたより、ずっと複雑な縄掛けだった。しかし、それほど感じるが、不快とばかりでもない。菱形にくびり出されて奇妙な疼きを感じ、身体を動かそうとすると、たまに上半身全体が締めつけられる。

正安の手が弥恵の膝を割った。

「あ……」

胡坐を組んで上体を折られたトヨの姿が、弥恵の脳裡に甦った。

「ぐ、うう……」

そのとおりの形にされると、想像していたよりはるかに苦しい。すべての縄が柔肌に食い込んで、息をするのもままならなかった。ごろんと――身体を起こされて柱に縛りつけられた芝居とは違って、おおむけに転がされた。たちまち、弥恵の裸身が濃い桃色に染まった。大股を開かされた、その中芯を真上に向けて晒す、芝居よりもさらに恥ずかしい形だった。背中敷いた手首の痛みなど、もののかすではない。肝心の所は隠しておったではないか――正安の声が聞こえたような気がして、それだけが救いだった。それなのに。腰に巻いている横よこ禪みつに正安の手がかかった。下帯の端は結んでいない。左

右の横褌にねじり絡めているだけだ。それが、ひと巻ひと巻ほぐされていつて。正安の左手が弥恵の尻を浮かせると。

「あああつ：：！」

しゅるんと大きな衣擦れの音とともに下帯を引き抜かれて、さすがに弥恵は悲鳴をあげた。しかし、まだ正安の手におのれを委ねていた。儂にだけは、そこを見せてくれぬか——その約束を果たしているのだと、目を固く閉じながら弥恵は自分に言い聞かせている。正安の立ち上がる気配。弥恵はおのれの秘肌に突き刺さる視線を、はつきりと感じた。視線にあぶられて、そこが燃えるように熱い。弥恵の中芯を見つめる正安の瞳に情欲の色はなく、むしろ嫌悪さえ浮かんでいる。

「やはり、これか：：」

数呼吸の後でつぶやくと、弥恵をそのままにして道場から出て行った。その足音を耳にして、弥恵は眼を開けた。見えるのは、雨漏りの

にじんだ天井板ばかり。蟬の聲が道場を包んでいる。

んで二つに折られた弥恵の尻の間近に座った。胡坐を組

「ひっ……」

中芯の亀裂を取り巻くように生えた織毛を逆撫でされて、弥恵は

身を固くした。それから、耳を疑った。

「すまぬが、ここを剃らせてもらうぞ」

「せんせい……」

祝言をあげて以来、ふたりきりのときには稽古の場を除いては意

識して使わないようにしてきた呼び方だった。弥生は正安の意図に

不審を持った。

「厭か……？」

うふつと、弥生の脳裡に髭面が浮かんだ。芝居小屋の座長——とい

を目にしている。そして、弥生の秘貝にこすりつけられた、彼の怒

張。そこから生じた妖しい感覚。その行為は構合も同然だったと思
っている。その秘事を、弥恵は生涯隠しとおすつもりでいる。

女にとつて、髪を切るのは過去を断ち切るも同然の一大事である。

ならば。けつして人目に晒してはならない部分の絨毛は、それ以上
に大切なものではなからうか。それを剃り落されるのであれば――正
安の手で、過去を清めてもらふことにはならないだろうか。

考えようによつては、人前で下帯一本の裸身を晒すよりも破廉恥
な行為ではあるけれども。弥恵はどうにかして、おのれを納得させ
たのだつた。そして、また――求めを拒めば取り返しのつかないこ
とになりそうな予感があつた。それほどに、正安の声には切羽詰ま
つた響きがある。

「お考えのとおりになさってくださいませ」

長い沈黙のあとで、弥恵がつぶやいた。
無言のままに、正安が動く気配。弥恵は、股間にひんやりした感
触を覚えた。絨毛が水で濡らされていく。そして、同じように冷た

いが、固いものが肌に触れて。
しよりっ：：剃刀が肌の上を滑って繊毛が刈り取られていくのを、
弥生は肌に感じた。
正安の作業は執拗につづけられた。ただ下腹部を剥き出しにする
だけではなく、盛り上がった秘貝の谷底にまで刃を当てた。
蟬が鳴き止み、また鳴いて休み、三度、四度と繰り返されて。最
後に、水に濡らした手拭いで股間全体を拭われた。
正安が立ち上がった。六尺ふんどしの前が、大きく膨らんでいた。
いつになく悠々とした仕種で、下帯を解いた。つぎの瞬間にも萎縮
せぬかと恐れている様子が、まるでない。

（まあ：：！）
足元から見上げているせいだろうか。正安の怒張が、座長のそれ
と同じくらいに思えた。
と海老責めに縛られてあおむけに転がされたままの弥恵に、正安が
おおいかぶさってきた。正安は左手で上体を支えて、右手を股間に

這わせる。

「あ……ん」

鮑の縁をなぞられて、弥恵は吐息を漏らした。正安の愛撫に馴らされ始めてはいるが、とりわけて今日は敏感になつていた。そして、おびただしく潤つてゐるのが自分でもわかつた。裸で縛られて、晒されて、剃られて。羞恥につぐ羞恥の極みで、おのれが女であることを思い知らされたせいなのかもしれない。

「くう……あっ」

吐息が、はつきりと控えめな喘ぎ声に変じていく。

正安の右手が弥恵の股間からはなれて、木刀のように硬くなつてゐる魔羅を握つた。

「いくぞ……」

先端を弥恵の秘貝にあてがつて、ぐうつと腰を沈める。

「んっ、んん……」

弥恵は奥歯を噛み締め唇を引き結んで、悲鳴をこらえた。引き攣

れるような、焼けつくような、破瓜の痛み。その奥には、ようやつ

と正安と真の夫婦めおとになれたという悦びがあった。

――弥恵を気づかっただのことか、それとも妻を女にして我も男として甦った悦びからか、正安はごく短時間で精をはなつた。

「ようやくに、できた。四十二年目にして、ようやく多津枝殿の呪縛を断ち切れた」

しみじみとつぶやいてから、正安は弥恵の縄をほどきにかかった。ほどきながら、●五の時からこの方、男としての機能はありながら女性と媾合えずにきた経緯を打ち明けたのだった。